



## ざりゅうせいぐん ペルセウス座流星群とは

天文の世界での夏の風物詩といえは、何と  
言っても「ペルセウス座流星群」ではないでし  
ょうか。8月の半ばに毎年<sup>かなら</sup>必ず多くの流星が  
流れるので、まず期待<sup>うら</sup>を裏切ることのない  
代表的な流星群<sup>だいひょうてき</sup>です。今年のペルセウス座  
流星群<sup>もつと</sup>で最も多くの流星<sup>しゅつげん</sup>が出現するのは、8  
月13日の明け方と予想されます。これを極大<sup>きょくだい</sup>  
といいます。8月12日の夜<sup>おそ</sup>遅くといった方が  
よいかもしれません。天候<sup>てんこう</sup>の条件<sup>じょうけん</sup>が良ければ、  
1人の観測者<sup>かんそくしゃ</sup>が1時間<sup>かんさつ</sup>観察すると、70個<sup>こ</sup>もの流星を数えることができるはずです。



ペルセウス座とペルセウス座流星群の放射点  
アストロアーツ社 ステラナビゲーター10で作成

ペルセウス座流星群は、ペルセウス座のある一点から飛び出すように見えます。この点の  
ことを放射点<sup>ほうしゃてん</sup>といい、放射点のある星座の名前からペルセウス座流星群<sup>よ</sup>と呼ばれてきまし  
た。放射点<sup>い</sup>の位置<sup>ち</sup>と、空のどのあたりに流星が流れるかはあまり関係<sup>かんけい</sup>がありません。つまり流  
星は空のどこでもほぼ同じ頻度<sup>ひんど</sup>で現れます。観察する場合も、ペルセウス座の方向を見る  
必要<sup>ひつよう</sup>はないということです。ただし、放射点<sup>い</sup>が地平線の上にないと流星は現れません。

今年のペルセウス座流星群は、天文雑誌<sup>ざつし</sup>や新聞などで、「最良<sup>さいりょう</sup>の条件<sup>じょうけん</sup>」とされています。  
これは、極大の日の月が、流星観測<sup>さまた</sup>の妨げにならないことを指しています。月明かりがある  
と、流星が見難<sup>にく</sup>くなります。ところが今年の8月13日は月齢4と、早い時刻<sup>げつれい</sup>に月は沈<sup>しず</sup>んでしま  
います。月は全く邪魔<sup>まった</sup>にならないということで、「最良<sup>さいりょう</sup>の条件<sup>じょうけん</sup>」ということができます。

この日、放射点<sup>い</sup>が十分に昇<sup>のぼ</sup>るのは、午後10時頃<sup>ころ</sup>です。それから明け方まで、多くの流れ星  
を堪能<sup>たんのう</sup>してみてください。今のうちに手帳の8月12日のところ<sup>しるし</sup>に印をつけておきましょう。

2021年7月12日記（解説員：田部 一志）